



TITLE:

四部分類の傳統

AUTHOR(S):

倉田, 淳之助

CITATION:

倉田, 淳之助. 四部分類の傳統. 東洋史研究 1943, 8(4): 247-257

ISSUE DATE:

1943-11-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/145798>

RIGHT:

四 部分類の傳統

倉田淳之助

日比野君から東方文化研究所漢籍分類目錄が出来たについて、解題をかねて何か目錄に關することを書けといふ命令を受けたがさて取り立てゝ書くほどの材料もないのに困却した。ところで今は昔、島田篁村博士が「目錄ノ書ト史學トノ關係」と題する講演史學雜誌 第三十九號で、目錄學は古書の存佚を知るだけでなく、併せて學術の源委を考へ、世道の隆替を徵することが出来ることを述べられ、金榜の「不通漢藝文志不可以讀天下書」の語、或は松崎謙堂が門人をして先づ藝文志を讀ましめたといふ例を舉げてゐられる。狩野君山博士も「日本國見在書目錄に就いて」藝文第一 年第一號の中に同じ趣旨を述べてゐられる。其の他經術に造詣の深い方々にかういふお説は珍しいことではないが、漢志だけではなく、目錄書を讀むといふことは學術の背景を要し、

難しいことのやうに思はれる。殊に近頃のやうに引得索引類が完全になればなるほど、讀む機會は愈少くなり、各の目錄が持つ特徴も忘れられ勝になる。私共の「分類目錄」にも通檢があるので便利だといはれる。かくては後世より私共を毀つて、學術の衰へに始まるといふかも知れない。よつてこゝに今回の「分類目錄」の基本たる四部分類の傳統に反省を加へ、漢籍目錄の二三の特質を考察し、又いさゝか解題に及びたいと思ふ。

七 略の創徇

支那の思想社會が漢代に於て經の一尊に統一され、政治との結びつきはあつたにしても、其の後動搖しなかつたと同じやうに、其の思想社會を反映した目錄

が、七略の創定より四部分類への轉化はあるものゝ、其の根柢に於ては餘り動搖してゐないことは先づ注意されねばならない。現存目録の鼻祖たる漢志が七略を承襲し、七略の前には劉向等の校讐が先行したことは言ふまでもないが、この校讐より七略・漢志の成立に至る間に漢籍目録の特徴の大半は備はるのであつて、漢志が古典研究の上で占める重要さは同時に又目録學に於ても同様なのである。漢志を理解することは漢籍目録の持つ意義の一半を究めることになる。漢書藝文志は其の成立の過程を述べて

漢興、改秦之敗、大收篇籍、廣開獻書之路、迄孝武世、書缺簡脫、禮壞樂崩、聖上喟然而稱曰、朕甚閔焉、於是建藏書之策、置寫書之官、下及諸子傳說、皆充祕府、至成帝時、以書頗散亡、使謁者陳農求遺書於天下、詔光祿大夫劉向校經傳諸子詩賦、步兵校尉任宏校兵書、太史令尹咸校數術、侍醫李柱國校方技、每一書已、向輒條其篇目、撮其指意、錄而奏之、會向卒、哀帝復使向子侍中奉車都尉歆、卒父業、歆於是總群書而奏其七略、故有輯略、有六藝略、有諸子略、有兵書略、有術數略、有方技略、今

刪其要、以備篇籍。

こゝに記された蒐集、散亡、校讐、編目、の因果作用は後世も屢見るところで、目錄開端のこゝに其の例を見ることは興味深い。我が日本國現在書目錄も亦冷然院の火災が動機である。七略の佚文に據れば、武帝が獻書の路を開いてから、百年の間に、書は積んで山の如しといひ、其の量の多きを知ると共に、當時の簡策が翻閱書寫に手数を要するものであつたことを想像するが、劉向が校讐の命を受けたのは、本紀に據れば河平三年であつて、風俗通(御覽六〇六)は書を校すること二十餘年といふが、本傳に據れば、「向居列大夫官、前後三十餘年、年七十二卒、卒後十三歲、而王氏代漢」とあつて、卒年を推算して綏和元年と認めて良いやうであり、校讐に従事すること前後十八年である。其の子歆の傳には

河平中受詔、與父向校祕書、講六藝傳記諸子詩賦數術方技、無所不究、向死後、歆復爲中學校尉、哀帝初即位、大司馬王莽舉歆宗室有材行、爲侍中太中大夫、遷騎都尉奉車光祿大夫、貴幸、復領五經、卒父前業、歆乃集六藝群書、種別爲七略。

とあり、以上が漢志成立までの事實の記載であるが、この校讐が兵書・數術・方技の兼ね難きものに分任の制をとりながら、一書畢る毎に劉向が敘録の仕上げをしてゐる。彼の學問が一頭地を抜いてゐたにもよるけれども、體例の統一はさうせねば期せられない。七略がこの結果に基を置く點に於て、目錄學史の上からも重要な關係を持つのである。編目に於ても分任に如くはなく、但最後に統一を要する。後世目錄の増刪が體例の統一を缺く場合は屢あり、殊に七略を承襲した漢志が、七略に無いところの太玄・法言・樂・箴の篇を一つとして儒家類に入れ、鄭樵・章學誠等の訾議を受ける所以である。又此の校讐が翻閱書寫に不便な簡策であつたにしても、子歆を始め、漢書中に散見する杜參（管子敍錄作富參）班旂或は房鳳・王襲等の協力者があつてさへ、劉歆の上山海經表の建平元年までには二十二年を要した大事業である。校讐に對する敘録は各書に載せ、別に集め録して一冊とした別錄二十卷隋志唐志同は今は、戰國策・晏子・孫卿新書・管子・韓非子・鄧析の各叙録或は諸書に引かれた斷章零句があるに過ぎないけれども、それによつて校讐の内容或は叙録の體裁

を知るのである。叙録が篇目を擧げ、校讐の次第、撰者の紹介、書の内容、眞偽、評斷に及び、後世解題の範として、四庫提要の先蹤もこゝに見られる。

歆の傳に「講六藝傳記諸子詩賦數術方技、無所不究」とあるのは、歆に七略の編纂があるに本いた語であらうが、向の死後、校讐の辛酸を共にした子歆が父の業を卒へるの命を受けたのは當然である。しかし其の爲に七略は歆の手になつたにしても、其の創意が向歆何れに出でたか分ち難くなつた。別錄・七略共に開元書目に本づく新唐志に著録された後亡んでしまつたものであるが、（別錄は通志藝文略、焦氏經籍志著録）漢志（前引）には「會向卒、——哀帝復使向子歆卒父業、歆於是總群書而奏其七略、」といふ。總目の鼻祖たる七略がなぜ略と題するかは明にして置きたいと思ふが、通説は別錄の繁に對して略と名づくといふ。これは別錄が、七略より先に成つたことを前提とする。七略の成書の時期は上山海經表の建平元年及び書を太常博士に移して諸儒の怨恨と大司空師丹の怒を買ひ、出でて守たらんことを求めてゐるところから多分建平元年頃であらうと推量されるが、別錄の成書の時期については

更に明文がない。阮孝緒の七錄序廣弘明集卷三には昔劉向校書輒爲一錄、論其指歸、辨其訛謬、隨竟奏上、皆載在本書、時又別集衆錄、謂之別錄、即今之別錄是也、子歆撮其指要、著爲七略檢論卷二といふ。阮孝緒の解釋に従へば「時又」といひ、下に「子歆」とあるから、別錄は向自身が随時に衆錄を集めたものといふことになる。しかし勿論校讐そのものが未了にして死んだのだから別錄は其の手に完結したものでなく、別錄には恐らく歆の叙錄も含まれたであらう。すでに上山海經表が建平元年であり、七略より後れたかといふ推定も行はれる。甚しきは「時又別集衆錄」といふは、向歆の手に出たものでない。多分七略が出来上つたので、時人が始めて群書から其の錄を書き出し、歆の書に附入して簡単に兩方讀めるやうにしたのだ國立北平圖書館刊第四卷第一號余嘉錫目錄要籍提要といふ。七略より前又は同時といふ普通の見解に従ふとしても、七略中の輯略に對する解釋はどうなるか。別錄が同じく歆の手に結輯されながら、輯略以上の詳細なものを附する筈もない。且つ性質の異なるものであるから、向の條例の如きものであるにしても、七略に、簡略にして撮ることもあり得まい。別錄には

輯略に匹敵するものはなかつたであらう。略には左傳の「天子經略」「武侯之略」のやうに「界」といふ義がある。そこで章炳麟は「略者封畛之正名、傳曰天子經略、所以標別群書之際、其名實素然」檢論卷二といふ。しかし略は元來總舉する意味を持ち、それから引伸して簡略の意となる。漢志の「歆於是總群書而奏其七略」を平心に讀めば、群書を總括して七略を作つたので、言ひ換へれば「群書七略」である。群書を分類し、一覽にするといふことは、當時としては破天荒のことであらう。其の意味を取つて七略と名づけたものと解する。七錄序に「其一篇即六篇之總最、故以輯略爲名」といふによくあてはまる。ついでながら、漢志小説家小序に「可以通萬方之略矣」の用例がある。先には淮南要略訓の例はあるが、漢志中には書名に略を用ひた例はなく、隋志には頗る流行したことを見る。

七略は斷片的ながら其の佚文から推せば、撰者、内容等に關する記述もあつたやうである。漢志は更に「刪其要」して成つたものであるが、「入」「出」と注するもの以外、分類次序には増刪はない。しからば漢志に見るやうな七略の分類は別錄に於てはどうであつた

か劉歆の本傳には「種別爲七略」といふから、別録が後に成つたものとすれば問題はないけれども、前にありとすれば、別録には「種別」の事實がない筈である。

しかし、兩書を目覩する隋志簿錄篇には「劉向別録、劉歆七略、剖析條流、各有其部」といひ、別録にも分部があつたことになる。これは恐らく校讐の初に分任があつたのであるから、別録が衆録を集めたものに過ぎないとしても、大別は自ら存する筈で、七略の「種別」は「序六藝爲九種」或は「六略三十八種」といふやうな更に細い分類を指すのであらう。一旦七略が出来る、と、別録の書名は七略に對する別録の如く解され易い。そこで阮孝緒がわざ／＼解釋して「別集衆録」といひ、更に「今之別録是也」とも言つたのである。しかも隋志以下の著録は七略別録となつてゐる。

七略の分類が父向の意を受けたか、乃至は歆の獨創に出るか、は定め難いけれども、實際の結撰が劉歆になる以上彼の分類と見て差支ない。しかし其の分類は前代よりの積成があることはいふまでもない。かの莊子天下篇・尸子廣澤篇・荀子非十二子篇解蔽篇・韓非子顯學篇・呂氏春秋不二篇等に見ゆる論客の區分は著名

なものであるが、韓非子に「儒」を擧げてゐる以外、何れも姓名を指し、其の説の特徴を記す底のもので、且つ支那の思想家の常として斷片的な論説であり其に對する評論は區々となり勝である。分類としては自己立説の對象として數へられたものでなくて、もつと全體の立場より見られねばならぬ。淮南要略訓に縱橫家が見えるが、明に六家 一陰陽家 二儒家 三墨家 四名家 五法家 六道徳家を數へた史記太史公自序の所論は、最も學派的區分を行つたものである。この六家は淮南子の縱橫家と共に、劉歆の諸子略の根幹となり、雜家・農家・小説家に加へられて諸子略を形成したのである。しかしこれは漢の統一二百年、殊に董仲舒の「諸不在六藝之科、孔子之術者、皆絕其道、勿使並進」といふ對策があつて百二十餘年後の分類であつて、諸子略は六藝略に次ぎ、經學によつて思想統一を遂げた結果を示し、その昔、齊の稷下、遊説の士數百千人といふ處士横議の狀を表すものではない。先秦の書を取扱ひ、其の學術の源流を辨じつゝ、分類は漢代思想社界の狀によつたのである。六藝略・諸子略に次いで、詩賦略は漢代に盛行し、向等の校するところ向

杜參には作もある。兵書については漢初張良韓信の刪定した兵法があり、醫藥・卜筮・種樹の書は秦に於ても去らざる所、夫々大綱の別は自ら存したのであらう。

これら分任に出づる兵書略・數術略・方技略を以て構成した分類は、當時としては穩當であると思はれる。

しかし支那の文化が組織と獨創に弱點を持つことは、目錄學に於ても、現實の個々を處理するには比較的忠實であるが、先づ自らの思想規範を立て、個々を其の範疇に律するといふ點に乏しいやうである。これは施いては數量主義となり、附庸と雜が多く用ひられる。分類の現實主義は、分類の規準が不統一となり易い缺點はあるけれども、一面には其の時代の學術思想の消長を端的に表す優點がある。

兎に角劉向等の校讐が盡く書物に良い結果を残したとは言ひ難いが、其の二十餘年に互る校讐の努力と、それによつて生れた七略の分類が草創の困難にも拘らず、永く支那の目錄の基幹となり得たことは、後來其の校讐と編目に拂はれた努力を凌ぐ研鑽が無かつたことを意味するものである。しかも亦亡失せんとする過去の精神的所産を、現代の知識に結びつける目錄學の

任務を最も良く果した點は、後來の他の如何なる目錄よりも大きいのである。

七略の編纂あつてより約九十年、漢書十志の一つとして採入された。その九十年の間には王莽の末に燒かれることあり、光武の好文によつて又充積蒐集のことあり、祕閣の藏は必ず變動があつたに相違ない。しかも校書郎班固は「今刪其要、以備篇籍」と序して七略を承襲し、僅に楊雄・劉向の書を入れ、重複を出し、其の文を削つたに止まる。其の態度から推して、又阮孝緒の「其一篇即六篇之總最、故以輯略爲名」の解釋から漢志の小序は輯略を分ち節録したもの、輯略は學術の源流を重んずるもの、今詩賦略に總序あつて小序がないのは其の間の事情を物語るかと思はれるが、衆訟紛々、にはかに是非を定め難い。

既存の目錄をとつて史志の一篇に備へたことは、班固より倂をなすものであるけれども、これによつて得るところは、東漢の現藏を録するよりも固より大きい。劉知幾の妄言たるは言ふまでもあるまい。

四 部分類の成立

一旦分類の先例が開けると、それを打破して新分類を樹てゐることは困難である。私人の目録ではなく公藏の場合是一個の見は立て難く、前代の成法に従ひ易い。又尙古趣味だけではなく藏儲の實際問題と伴ひ、その制約が微少なりとも分類に影響したことがないとはい

へまい。東漢に於ては「依七略而爲書部」隋志といふ。七略の後隋志に至るまでには二十餘種の目録が編せられてゐるが、只その名を記録されるのみで亡佚して傳はらない。僅に七錄序と隋志序に注目すべき數種の綱目が擧げられてゐる。説明の煩を避けて表にすれば

劉歆七略		荀勗晉中經簿		王儉七志		阮孝緒七錄		隋志	
輯略	甲部	六藝及小學等書	經典志	六藝小學史記雜傳	經典錄	六藝	經部	十種	
六藝略 九種	乙部	古諸子家近世子家 兵書・兵家・術數	諸子志	今古諸子	紀傳錄	史傳	史部	十三種	
諸子略 十種	丙部	史記・舊事・皇覽 簿・雜事	文翰志	詩賦	子兵錄	子書・兵書	子部	十四種	
詩賦略 五種	丁部	詩賦・圖譜・汲冢 書	軍書志	兵書	文集錄	詩賦	集部	三種	
兵書略 四種			陰陽志	陰陽圖緯	術技錄	數術	道經		
術數略 六種			術藝志	方技	佛法錄		佛經		
方技略 四種			圖譜志	地域及 圖書	仙道錄				

道佛附見

紙幅の都合上七略・七録・隋志の種目を略するが、魏の祕書郎鄭默の中經に因つて晉の祕書監荀勗が更に新簿を著し、宋になつて祕書丞王儉が七志を撰し、梁では阮孝緒が七録を爲つた。七録序に「劉氏之書、史書甚寡、附見春秋、誠得其例、今衆家記傳、倍於經典、猶從此志、實爲繁蕪、且七略詩賦、不從六藝詩部、蓋由其書既多、所以別爲一略、今依擬斯例、分出衆史、序記傳錄、爲內篇第二」といつてゐるが、これは文献の整理が悉く學術の區分と合致し難く、時には數量に左右されることを率直に認めた言であつて、後代にも通するのである。七略について言へば、諸子略は六藝略の次に置かれてゐるが、尙戰國處士橫議の餘勢を以て十種あり、術數略方技略は共に秦の燒かざる所を以て六種、四種あり、史傳は其の逆と見られる。漢より以來史書の簇出は、荀勗の中經簿に丙部の獨立となり、六藝・諸子・詩賦と共に四部の根幹をなすに至つた。まことに四部分類の先聲である。けれど四部には總括されたが、混在を免れ難い。右の表には出てないが、荀勗より約七十年遅れて晉の著作佐郎李充が、荀勗の舊簿にならひ、その乙丙の書を換へ、甲部五經、乙部

史記・丙部諸子・丁部詩賦とした。本傳に「煩重を刪除し、類を以て相從ふ。分つて四部となす、甚だ條貫あり。祕閣以て永制となす」といひ、七録序には「これより後、世々相祖述す」といひ、これ以後多くの目錄は殆んど四部を題名としてゐる。王儉の七志は分類の名稱は變へたが、七略にならうたもの、其の中の圖譜志は、七略が六略なる爲其の一つを充したものである。阮孝緒の七録は其の序にも言ふ通り七略と七志とを斟酌したものである。子兵錄については「兵書既に少し、別録するに足らず、今子の末に附す」と言ひ、數量主義によつて併合を行つたもので、術技をも併合する一歩手前である。文集錄の小類に楚辭部・別集部・總集部・雜文部を分つたことは、雜文部を除けば今に至るまで奉じて準繩とする所である。別集と雜文との區分は恐らく文體にあつたことと思はれるが、由來集部は雜なるものである。今日これを文學の對稱とするのは詩文の名の下に、比較的文學の要素を多く含むを以てであつて、碑銘・傳贊・奏疏等をも包容してゐるし、表現結構を重する點より言へば、史漢も又其の列に入る。文學の立場からは寧ろ七略の詩賦略が純粹に

近い。七志には道佛は附見したといふが、七録には佛經書が道經書に先じて二録をなした。但總目に佛經書が入つたのは、七録序の古今書最によれば、晉中經簿が初である。

隋志に至つて經史子集四部の名は確定した。其の序によれば、馬史班書王阮志録を會萃するにあるやうだが、直接は七録に依り、各書條下に梁に云々といふ注は其の比較によるものである。日本國現在書目は又此の隋志に従つたものであることはすでに言はれる通りである。史書日に繁く、七録の紀傳録が史部の定名を持つたことも、既に久しく經書と並び重ぜられるやうになつてゐるので當然の勢である。(帝及即位、集公卿已下有文學者八十餘人、於麒麟殿刊校經史。周書四。又奏追李文博陸從典等學者十餘人、正定經史。隋書五。後魏始都燕代、南略中原、粗收經史。隋書三。子部に方技數術が併されて四部の統合は略成り、「於東都觀文殿東西廂、構屋以貯之、東屋藏甲乙、西屋藏丙丁」隋志といふ事實と相應するに至つた。しかも「道佛者、方外之教、聖人之遠致也」として四部の末に附せられ、唐志に至つて道書と釋氏は道家に併されて子部に統合され

た。尙隋志に注意されることは、著録に撰擇の加へられてゐることである。「其舊錄所取、文義淺俗、無益教理者、並刪去之、其舊錄所遺、辭義可采、有所弘益者、咸附入之」といふ態度は、見存書と著録數に非常な開きがある。たゞ猥雜の程度にもよるが、取捨は一時にいで、書籍の生命は永い。後代にも取捨の厄は免れない。

經史子集の分、更に其の中の小類には次序の上に價值判斷が行はれてゐる。儒家思想の道を中心とする考、いはゆる大上有立德、其次有立功、其次有立言で、この種の見地は其の證據を擧げるに遑がない。

以上で四部分類成立の大略と開合の理法を概観し得たかに思ふ。以後のことは一々論及の餘裕はないけれども、四庫全書の大成といひ、近人の整備といひ、皆この開合の理法を辿る。十進法の流入による動搖などは自ら別問題である。

東方文化研究所漢籍分類目錄

今日漢籍目錄を編纂し四部分類を探るとすれば、矢張り清の四庫全書總目によつて大成され、清朝の目錄

學者によつて改革され、或は近人によつて研究された結果を検討採用するにある。試みに四庫について議すべき二三を擧げて言へば、經部禮類の通禮之屬・雜禮書之屬、子部譜錄類があり、其の後の學術發展と文獻の増加よりすれば、史部目錄類中の金石之屬或は卑視された集部詞曲類があり、又子部雜家類雜編之屬に附庸たる叢書は、龔に澹生堂書目に萌芽し近くは書目答問に叢書部として分立した。更に近來書目編纂に難問となつてゐる近代科學の影響を受けた著述がある。

これに對しては種々な方法が試みられてゐるが、此の目錄では別に近人雜箸部を立て、統攝した。

此の目錄に入れられたものは昭和十六年二月現在で昭和十三年發行の漢籍目錄、十六年發行の續增漢籍目錄に載するところの單行書、叢書子目を綜合分類したものである。目錄を價值あらしめるものは蒐集である。旺盛なる研究慾、嚴格なる採擇方針、これが目錄編纂までに拂はれた努力である。研究に副ふべきものなるが故に、又物質上の制約を免れないが故に、遺漏なく蒐集された方面と、然らざる方面とがある。又實用の精刻本は蒐集されたが、明版以上の所謂稀覯書は

少い。尤も蒐集の豊富と認められる叢書は、當初武進の陶湘氏の舊藏を入れたのを基として、特に網羅に意を拂つたものである。叢刻は其の數約一千餘種。單行書叢書子目を合せて約五萬部三萬餘種。書名人名通檢を併せれば約十五萬のカードを携行するに均しい。從來は一叢書の目錄さへ單行されたものである。研究には一科の洞悉を要し、屢專科目録が編せられてゐるのであるが、研究者の立場よりすれば、多數藏書目錄よりも一つの綜合された分類目錄が望ましい。しかし俄に綜合目錄が得られないとすれば、この分類目錄が叢刻の檢索に解決を與へたことゝ、それに研究上の實用書を配したことは、廣く使用され得る意味を持つものと思ふ。

分類内の各書の序次は、特殊なものを除いて撰者の生年によつたが、分類目錄として採るべき他の方法は卒年によるか、成書の年代による等が考へられる。此の中にも近人雜箸部は概ね成書の時によつた。一人の生卒を明かにする爲に幾日かかり、何年か後に明になつたものもある。只說郭の如きものは舊題を存したが爲に同書分出が出来たが、通檢で補正されよう。分

類の上に於ては、分類の異なるものは附録書と雖も分離して編類してある。原形を失ふ點もあるが、姉妹書である十三年十六年刊の二目を参照されたい。叢刻の内容に於ても同様である。又現行の書に本いて居る爲に小方壺齋輿地叢鈔の如く一書の一篇を取り出したものも、矢張り一書として取扱はれ、原書との關係が示し難い。此の點は讀者の理解に俟たねばならぬ。

しかし分類がいかに精密に行はれても檢索に不便があつてはならぬ。近來の書目が索引を附する傾向は喜ばしい。内容の不備も補正し得る。章學誠のやかましくいふ互著も解消する。分類目録と書名・人名通檢とは必ず三者一體として行ふべきものと考へる。叢書子目索引の如きものはあるが、分類は分らない。人名索引にしても同様であつて、單行すれば勞多くして功は少い。人名通檢についていへば、從來は四庫全書總目の一萬餘種に對する索引、金陵大學の叢書三百六十餘種について編せられた叢書子目備檢著者之部があるに過ぎない。外に藝文志綜合引得、或は傳記綜合引得、人名辭典の利用等であつたが、史傳に於ては廻りくどく著作の記載は多くは詳でない。この點でも三萬餘種

に對する人名通檢は役立つところがあらう。

七略は源流を説いた。目録は學術史と表裏する。分類目録成るに當つてもこの事を考へる。編纂の始末は跋に述べられた通り、私としては濫竽、走卒の任を致したに過ぎないけれども、これによつて今後の研究に貢獻するところあらんことを祈ると共に、誤については偏に叱正を願ふ次第である。